

行事七里、石砂山にて、はゞ吉里程あり。左八
ひやう、として、ゆくえもしらぬ海の面、沖に
釣する海士をふね、磯辺をわたるはしり舟、
塩焼浜に濁の渡、見所多きながめなり。最上
川の前を袖の浦と云名所あり。

出羽国 うやむやの関 最上川 袖の浦

象潟 板敷山 別れの島 鶴路の島

今俗に宮の浦と云、最上川・赤川其外の川、この
水落合所を銚子口、彼いな舟にのり、大舟壹艘二
小舟三艘先へ立て綱をはり引せ行也。川はゞ
式百間余有。川端に酒田の侍代官衆あまた出
積申御蔵屋敷有。はゞ五十間二長サ九十間、さく
をふり廻して御勘定衆の制札有。夫酒田の
町へ七ツ時に御着。町はづれ迄服部瀬兵衛出らるゝ。

伝馬町迄松平藤兵衛御迎二出被申、一礼有之。三ノ町
御宿燈屋惣左衛門、御相使八同町加賀屋与助と申者
所へ御着。加茂村酒田迄九里。

- 一、十七日、酒田御逗留有之、町方御巡見、寺町通り
- 一、安祥寺 一向宗、鐘楼有
- 一、常福寺 一向宗、同断

(以下略)

(原本 大綱 遠藤忠征氏蔵)

天和二年（一六八二）

大泉庄内御巡見紀行

天和二年壬戌八月十一日羽州鶴岡之御城下
西南へ出、八日町を通り過て番田村、左に金峯山
右に井岡村。夫より山道にかゝり、湯田川村御屋
休ミ長福寺（寺領百五十石）。本尊觀世音、弘法大師開基
之由。千躰仏、恵心之作、三幅にて三千体、表
具して掛物有。其外弘法大師御筆繪像
有之、上之山に觀音堂有。出羽一国の銀杏の
大木有。町に湯壺七ツ有。町中に流川有。川端二
手水の湯とて、臼の中をほりてふせ申、内より
湯わき出る。夫が坂中に大日堂あり。弘法大師
之作之由、蓮華座かけて式尺五寸あり。これを過、
町田川村と申所也。是が北に当て名木の梅樹有、
古木大樹にして根方々へ出、わかばへ何程と云数
をしらず。夫より矢沢山八幡宮、神主主計と云。
八幡太郎義家公の庵あり。此山義家公の
陣取給ふ山なり。向の石山に武衡・家衡陣
場之由。麓に右式人の御影あり。此間廿五丁可
有候。町田川村石堂山と申所、武衡・家衡墓所
あり。町田川村の村ノ上に田川館と云山有。義家と
武衡・家衡戦之節、町ノ者上ノ山へ取上り逢申
山之由。夫が過て、鬼坂とて大峠有。登ル事二十
丁余、峠の頂に鬼の水のミし所有。難所なり。
下りて菅ノ代村、鶴岡が四里七丁、八月十一日菅代
村御泊。岡田九右衛門・北原伝兵衛御供也。

一、十二日菅代村明五ツ半頃御発駕有之。拾六七町
過て、あつミ坂とて大峠有。夫より山中へかかり、
山坂の難所あり。吉里程過て温海河村有。去ル
四月二火事出来、七十軒余、村切に吉軒も不残
焼失仕候。夫々吉里程過て木ノ俣村、是々拾九瀬と
申川、吉筋を十九度越申候。川の広さ二十間余、或
十六七間程有。左右に高山。谷合を行故、あなたこなた
と渡り申候。山中にて夕立雨にあひ申候。夫故川の
水増候。今少し洪水ならバ越る事成間敷
程の水也。十九瀬の内、川十を越て、小国因幡守
とて其昔は城主有之由。八月十二日小国御泊。菅代
より小国迄三里十五丁。

一、十三日、小国を朝六ツ半頃御立。折節大雨風し
きり二而、氷降。雷方々にてなり、只今是へ落
かかるかとあやしむ内に、小国峠へ打かかれバ、峠難
所にて、頂に杉之大木有。夫 山中を吉里過て
又峠有。過て麓に川有。小鍋川と云。是々左へ
行、小鍋関所有。関所 十四五丁登りて小鍋峠、
越後・出羽の境有。いも沢ケ森、山ノ長サ西東南ノ
方越後、北の方庄内、峠境目也。此峠頂々水
流し次第。日本国と申山を越、庄内の境有。東が
越後、西の方庄内領いも沢山と日本国山との中に
越後・庄内・秋田・酒田の海道有。道はば一間。此道
いも沢が森迄六十間斗有。此境へ鶴岡々九里十
壱丁有。越後の山々重りならんで有。葡萄山八
殊に大山二見ゆる。夫々御帰り。小鍋村々右へ川二
付て下る。此川拾五瀬と云。川を拾五度越る故

なり。雷しきりになりて雨の降る事篠をつくがごとし。左右大山にして、馬にのられず。駕籠乗物も不叶、歩行にて細き繩手をゆく所有。

されバ三里の道を朝六ツ過二出て八ツ前に着程の難所也。鼠ヶ関御昼休、亭主佐藤久兵衛。

出羽・越後の境八鼠ヶ関村南はづれなり。義

経記には念珠か関と有。されバ鼠ヶ関と云

事、海端峨々たる岩を鼠が喰ぬき洞となりたる

を義経通り給ふ道なり。出羽・越後ノうちへ入て十丁余、海の面に島見ゆる。越後の青島と云。はば

式里、長サ三里可有かと云。鼠ヶ関村の向海中に

弁財天立給ふ。是ハ海漫々として北浦の

海一へんに見ゆる。折節大風にて浪家をミたす

がごとく冷敷高ければ、弁財天御巡見不叶。是

より磯伝ひに行。漁師の家所々二有。早田村・大岩

川村・小岩川村・住吉坂・たいこ坂・釜谷坂、馬にのられぬ所、其数をしらす。右は高山にして、左八数千

ぜうの海端なれば、肝をひやし胸を押して、険々たる

そば伝ひ、猶行先も心細き切通し有。誠二北国

筋のうき難所と申伝る如くなり。温海橋を

打渡り行に温海村、十三日七ツ半頃二御着

御泊、名湯有。湯壺家々二有之、其湧出る湯口

にてハゆで物などするといふ。

一、十四日、湯温海村を四ツ時御立、温海村を行に、

塩を焼竈四ツ有、皆土かま也。一釜より二斗入の

塩式拾俵ツゝ出るよし。爰にてかま干あわび出ル。

夫より所々に漁師の家ありて、よなご・暮坪・鈴。

飛ヶ坂、式拾三まがり峠へ登て、向に道見へす。海を
のぞきて下る事拾丁余過て磯辺を行に

塩表石とて磯に塩表を積かさねたる様の岩
五拾間余、暮坪に立岩とて海の中に高廿五十

丈斗り、まわり八百五十間程もある立岩有。昔八

此岩の上に宮ありしと所の者云。彼を見、是を聞

内に鬼の掛橋とて山々海へ掛橋を掛たり。山の

岩、生れ付にして自然とそり橋のごとく、高廿

吉丈斗、長廿六間、はゞ九尺有。此岩橋の下を往

還とす。夫々義経の馬乗馬場、海端の岩、平

にして的場のごとく、長廿拾六七間、はゞ五六間、中二

馬だらひあり。馬ひやす所有。是々大波渡村・小

波渡村と云有。されバ西行法師の歌に

山畑のそバのたつきに居る鳩の

友よぶ声のすごきタぐれ

何とやらん物すごき、たつきもしらぬ岨伝ひ、左
を見れハ、岩のはざまに掛たるミるめ・青のり・堅

海苔、藤戸のいわのはさまより、そびへて見る所

あり。岩をおこし、のミしてうかち切通しあり。小浜

峠有。北の外を笠取山と云。嵐はげ敷、笠をか

むる事ならざる故、笠取山と云。峠下りて三瀬村、

十四日八ツ時御着。湯温海より四里三丁。

一、十五日、三瀬村を御発駕ありて、葉山山神福寺

御巡見。神主治部太夫。

本尊薬師、長廿壹尺三寸、古仏也。作不知。

前二観音、左右二十二神将有。

義経文治三年三月北国落の時、四五日御逗留

有之、通夜有し所之由。山の高サ二丁斗、砂山にして屏風を立てたるごとくなり。笠取山と相向てあり。此間四丁斗もあるべき歟。

一、同所立岩とて、薬師山と笠取山との間にて、鮭の魚取申湊有。

一、気比大権現。三間二式拾間斗の舞堂有。本尊観音にて三社あり。

一、剣巻尺六寸あり。作不知。

一、扱式ツ有。義経のおいとも申伝る。

一、十六善神掛物（鳥羽院の御震筆之由。絹地金泥なり）
一、福寿掛け物、織物にて中に色紙形あり。福寿と中に有て、両脇に八長命富貴とあり。

一、気比大権現御手洗の池とて山中にあり。常住水ありて、いかなる日照にもかわく事なく、山中なれとも木の葉一葉なく、深事知る人なし。

池に七用あり。飛磔ツブテにても打候得うつちかひいひえバ、其俣大風大雨降てあれ申候由。夫より水なし村・中山村・片貝村・大谷村・上小中村 御領分中小中村の百姓出迎、所々様子御尋有之。御通り道より北に

とちや村・大山村御領分也。昔八酒井宮内太輔殿領分之由。酒井備中守殿へ分地之後、備中守殿

早世故世継なくつぶれ御領二被成候。大山峠・加茂峠とて大峠有。下りて左りに加茂の社比丘尼寺有。所々鎮守権現堂有。夫より明石へ御通り、明石山竜宮寺、本尊聖観音、木像之由。秘仏、開帳なし。慈覚大師の開基之よし。貞安弍年に藤原朝臣武藤太輔、夢に見へ給ふ。

海中に仏有とて海辺を見給ふに、其昔慈覺大師、観音を建立す。明石の景地、加茂の町を過て浜辺に出、左は海、右八山岩を伝ひ虎豹にまたがり、かんかんとして肝をひやしはね越、飛越とびこえ、巖を踏ふみ、竜のきばを渡り、毒蛇の舌に乗よりもあやうき所を越して観音堂に至り、暫時に海上を御覽有て御帰、十五日七ツ過に加茂村御泊、三瀬村が加茂村迄四里五丁なり。今宵は名月なりとて、亭主屋敷の裏に二階座敷有。海の面を見晴して景色は更なり。大網をひけとて大網二はり出して引ひくに、鱒あじといふ魚あまたかゝる。よつて興じて見るに、ほどなく月は指出さしへてにけり。

一、十六日朝六ツ時御立有て、又大山峠を越て大山村二戻る。町之内二十丁斗過て馬町杉尾明神、石之鳥居あり。神なれば開帳あひらに不及およばず、夫それが大山善宝寺とて名譽なる寺あり。後に湯の浜村と云い浜辺あり。是は善宝寺へ竜灯上ルよし。善宝寺

建立の節、石場□□かへ八石則すなはち湯野浜村へ
(x) 辺八石の不自由なる
(x) り余り行に、浜茄子
(x) ほうづきのごとし。色紅にして
花もやさしき物也。愚発句

もり砂の鱧なまこのけんか浜茄子
浜中村御昼休。加茂村が浜中村迄三里三十丁。
此日は雨ふりて北風吹ひき、寒き事霜月頃の位に
ひゆる。浜中村にて焚火それにあたる。夫それ 浜辺を